

「学び方」から学校を考える

～最新学習歴を更新していける児童・生徒へ～

PROFILE

本間 正人 ほんま まさと（京都芸術大学教授・副学長）

1959年、東京都生まれ。東京大学文学部社会学科卒業。ミネソタ大学大学院修了（成人教育学博士、Ph.D.;戦略プランニング修士号、Master of Planning取得）。「教育学」を超える「学習学」の提唱者であり、「楽しくて、即、役に立つ」参加型研修の講師としてアクティブ・ラーニングを25年以上実践し、「研修講師塾」を主宰する。NPO学習学協会代表理事、NPOハロートリム実行委員会理事。「ほめ言葉ハンドブック」（共著、PHP）、ロングセラーの「コーチング入門」（日経文庫）等、共編著多数。



1 学習環境の激変

人は人から学ぶことが非常に重要です。学校でも先生や同級生、周囲の人から日々学んでいます。このような学びの基本とも言える環境が、2020年はコロナショックのため大きな危機にさらされました。一方で、インターネットやタブレット・スマートフォン等の電子機器を利用した学習形態であるeラーニングが広く受け入れられるようになったこともまた事実です。これにより、よくも悪くもこれまでブラックボックスだった教育の内実が保護者にも伝わりやすくなりました。とある受験塾ではあまりにひどい授業内容に保護者から苦情が殺到したという話も聞きますが、今まで以上に授業の質が問われるようになったという点は学校現場も同様でしょう。

IT技術の発達と普及により、学習アプリや授業動画等で自学することはずいぶん容易な時代となりました。再生回数を伸ばしている授業動画の中には、本業の教師ではない、子どもたちに人気のあるお笑い芸人等によるものもあります。話術に長けた人が一夜漬

けで、子どもたちを引きつけるおもしろい授業をすることは簡単です。このように、教師でなくとも「教える」役目を担えるような状況はすでに生まれています。ですが学校の中だけに身を置いていると、よほど意識していない限りこういった環境の激変にも気付にくいものです。

例えば今の教室の構造は50年前とほとんど変わっていません。今は仕事で書類を作るにしても、わからないことがあればインターネットで調べれば済むことです。ありとあらゆる情報に簡単にアクセスできるという環境があれば、個人の脳内にストックされた分を遥かに上回る知識を活用できます。そしてこれは、多くの社会人が日常的にやっていることです。ですが、学校教育では未だに単体としての性能を過剰に重視しています。言い換えれば、「紙と鉛筆」に過剰適合した能力を評価しているのです。大学入学共通テストに記述式問題を導入しようという議論もありましたが、記述式が導入されたところで根本的な思想は「紙と鉛筆」のみを前提とするテクノロジーから全く脱却できていません。江戸から明治へと移行する頃も、学びの

現場では「勉強の前に心を落ち着かせるため、墨をする」という行為が大事なのである。和の心である筆を鉛筆に持ち替えるなどけしからん」というような議論があったかもしれませんが、「紙と鉛筆」をパソコンやタブレットに置き換えることに反対しているというのは、そういうレベルの話だと思います。

日本の学校が伝統産業化する一方で、中国・シンガポール・ベトナムといった東南アジア諸国は学校教育に多額の投資を行い、ICT技術を効果的に活用してめざましい変革を遂げています。今日本で最も「紙と鉛筆」から遠いのは、通信制のオンライン上の学校等ではないでしょうか。インターネット上の高校ですから、理論上は生徒数を無限に増やせます。すでに突出した才能ややりたいことを明確にもっている生徒、通学圏内の高校が少ない生徒たちにとって、自由に使える時間も多く、自分の得意分野をどんどん伸ばせる環境は、魅力的な選択肢となりうるでしょう。実際に、5年で生徒数が開校時の10倍に当たる約1万5千人にまで伸びているような学校もあります。これまでは地理上の制限が有利に働いて、その地域の生徒を独占できていたような学校も、これからはそういった学校との比較の中で選んでもらえるような学校づくりをしていかなければならなくなりました。地域に場がなければできないような学びを提供できるかという観点は、学校の生き残りを考える上でも今まで以上に重要なものとなっているのです。

2 「学習学」とは何か

生物学ではラテン語で人をホモ・サピエンス（賢い人）、経済学ではホモ・エコノミクス（経済人）と呼んでいます。学習学ではホモ・ディスケンスと呼びます。これは、「自ら学ぶ存在（＝アクティブ・ラーナー）」という意味です。私が提唱している学習学では、「人間は学ぶ存在である。生まれてから死ぬまでずっと学び続け

る」ということを基本テーゼとしています。学校の先生をしていると学校教育に発想がいきがちですが、人生100年時代と言われる中で寿命も延びるわけですから、学校教育の箱だけを見るのではなく人生全体を考えて学びを設計する視点が求められます。

- 生物学ではホモ・サピエンス
- 経済学ではホモ・エコノミクス
- 学習学ではホモ・ディスケンス
＝「自ら学ぶ存在」（アクティブ・ラーナー）

例えば高校だと、どの大学に何人入れたかで教師を評価するようなところもあるかもしれませんが、本当にそのような進路指導が最適なのでしょうか。奨学金といっても貸与型の場合は返済義務が生じます。奨学金を取らせて大学進学に向かわせるよりも、高卒で就職して、学費を稼ぎながら通信制大学に通うという選択肢や、社会で働く経験をしてから大学入学を目指すといった選択肢を持たせる方が、生徒のためになるケースもありうるのです。コロナショックの影響で経済的な打撃があった家庭も多いであろうことを考えると、こういった選択肢が有効な家庭は案外増えているかもしれません。このような状況を踏まえると、「大学進学や高校進学の段階で人生が決まる」というような考えで進路指導をしないでほしいという思いはあります。要は、人生を長いスパンでとらえたときに、選んだ進路をいかにプラスにしていけるかが大事なのです。

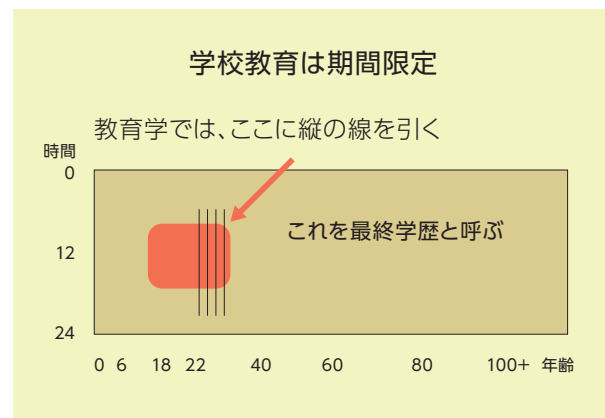
「教育学」から「学習学」へ

- 教える側中心の発想から
- 学ぶ側中心の発想へ
- Learner Centered Approachの重要性は昔から叫ばれてきた

先日同じく京都芸術大学副学長の小山薫堂さんと対談をした際、彼が「人は気付かないうちにいつのまにか最善の選択をしている」と言っていました。そう思うと生きやすくなる人はたくさんいると思います。今この瞬間はそう思えないかもしれませんが、後々そう思えるかもしれない。小山さんは「200年後に価値があるものを作るものづくり」を目指しているそうです。200年後を考えて作られているものはそれほど多くないと思いますが、私はその視点がとても大事だと思います。7世代後の子孫のことを考えて獲物を取りすぎないようにするというように、ネイティブ・アメリカンにはセブン・ジェネレーションズという考え方がありますが、その考え方とも通じる視点です。多くの地域で先住民は、自然と共存し、隣の部族と争わない、平和的に解決するといった知恵に従って暮らしてきました。彼らが生きていたのは、1泊2日で帰って来られるくらいの世界です。その中で血が濃くならないよう婚姻関係を結んできました。これらはどれも、種族の血を長くつないでいくための知恵なのです。1泊2日で大抵のところへ行けるようになった現代では、この考え方は地球規模で当てはめて成り立ちうるものとなりました。常に多様性を担保する、環境に配慮する、そして7世代後を考えて生きていくといった考え方は、SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) が広く知られるようになったことから伺える通り、現代にも必要なものです。200万円の車を買っても10年後には買い替えなければならないでしょうが、200万円の机を買えば、それは何世代にもわたって使い続けられる家宝になるでしょう。長く使えるものを少しずつそろえていけば、自分だけではなく子孫の人生までも豊かなものになります。近視眼的な部分にばかり焦点を当てるのではなく、時には200年後を見据えるような長期的な見方も必要です。

私たちは変化が激しく予測困難な、VUCA (ブーカ:

Volatility [変動性・不安定さ]、Uncertainty [不確実性・不確定さ]、Complexity [複雑性]、Ambiguity [曖昧性・不明確さ] という4つの単語の頭文字を取った造語) の時代を生きています。そのような中で、期間限定の学校教育が学びの終わりということはありません。だからこそ、学校教育の終わりを最終学歴とするのではなく、社会の変化に対応していくために常に学び続ける「最新学習歴」という考え方が大切なのです。そういった意味では、新しい仕事に就くことや恋愛、子育ても、最新学習歴の更新以外の何物でもありません。「子どもが親の思うようにならない」ということも学びの1つなのです。



学習学では、Life-long, Life-wide, and Life-deep Learning という表現を使っています。簡単に言い換えれば、人生の長きにわたって、学校だけではなくどこでも、量よりも質を大切にしたい学びを実践していくということです。学習学は学習を総合的に見る学問ですから、「学ぶことを教わる」と感じる学習者が多いようです。教育学だと講義形式で知識を教え込むようなスタイルのため、学習者はどうしても受け身になりがちです。一方学習学では、学習者が自ら主体的に学ぶことを大切にしています。手法としては、集合研修の中で学び合いを活性化するファシリテーターが学習者の学びを促進する形式や、1対1で個別に指導するコーチングが主流となります。質問されたことには何でも答えなければとプレッシャーを感じてしまう指導者も

多いのですが、そんなことはありません。自分で考え、自分で学んでいくための筋肉を鍛えることが大切なので、正解を与えることよりも、一緒に学ぶ姿勢を見せることの方が大事なのです。

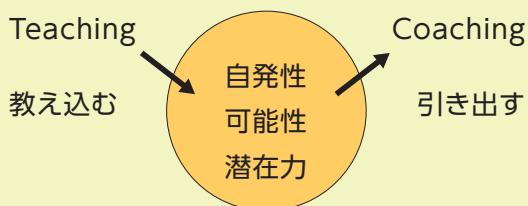
「教育学」から「学習学」へ

	教育学	学習学
指導者	Teaching (Teacher) 講義形式で 知識を教える	Facilitating (Facilitator) 集合研修の中で 学習者の学びを促進する Coaching (Coach) 1対1の個別指導
学習者	Being Taught (Teachee) 受け身で教わる	Learning (Learner) 自ら主体的に学ぶ

3 最新学習歴を更新していくために

「教育」と「学習」とでは、実はベクトルの向きが全く違います。外から教え込むのがティーチング (Teaching) であるのに対し、学習者の自発性・可能性・潜在力を内から引き出すのがコーチング (Coaching) です。最新学習歴を更新していける児童・生徒の育成を目指すのであれば、教師の役割は「教える」ことから「伴走する」ことへとシフトしていくでしょう。しかし先生方にとって、伴走型のコーチングについて概念的に学ぶ機会は少ないのが現状です。まずは、校長会でコーチング講座を企画する、教科書会社等が先生向けのコーチング講座を提供する等、先生方がコーチングを学べる機会を増やすことが第一歩です。

コーチングとは



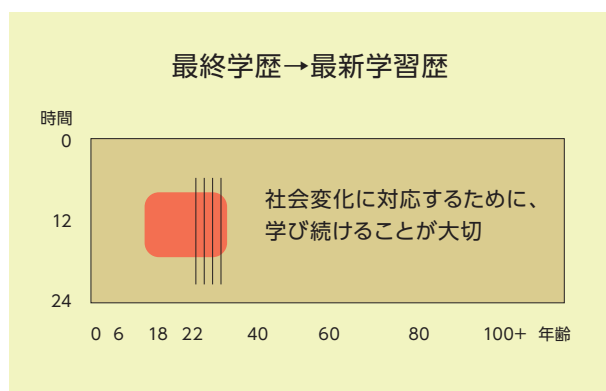
生涯にわたって最新学習歴を更新していける人材を育てるための効果的な手法として、他にも学校と外部をつなぐコーディネーター等の活用が挙げられます。私は、これまでの外から教え込むという「教育」的なアプローチが根底にある学校の在り方にはいくつかの問題点があると考えていますが、それを乗り越えるのが「人と出会わせる」ということなのです。

問題点の1つは、中高生くらいまでの人付き合いが親・先生・同級生程度にとどまってしまうがちな点です。大人のサンプルに触れる機会が限られると、将来の展望も偏ったものになってしまいます。

また、これまでの学校教育は「問題は1人で解決すべし」というメッセージを意図せず植え付けてきたような側面があります。例えばカンニングをすれば厳しく罰せられますよね。ですが社会に出れば、1人で完結する仕事はほとんどありません。チームで仕事することが大切なのに、普通の学校では圧倒的に競争主義が優位なモデルとなっています。学校では「相談することが大事だよ」とはなかなか教わりません。近年はようやくアクティブ・ラーニングやプロジェクト・ベースド・ラーニング等にも取り組まれるようになってきたので、こういった状況を変えていくチャンスだと感じています。

それから、学校教育の中で時間は均質なものとして扱われています。卒業するために小学校は6年間、中高は3年間ずつ、学校という場にいることが重視されていますが、実感としては時間が均等に流れるということはありません。やる気がないときもあれば、集中しているときもありますし、人によっても濃度は違います。ある人の一言で人生が変わったというように、人生における決定的な一瞬もあるのです。しかし最終学習歴を珍重する社会では、決まった年限在籍していたことに価値があるとされ、人生における時間の実態を反映したものになっているわけではありません。

こういった問題点を解決しうるのが、人と出会わせる・人から学ぶというアプローチです。もちろん学校の先生との出会いがよかったという人もいますが、それは確率の問題で、それ以外のロールモデルを必要とする人も多くいるはずです。多くの大人のサンプルに出会えるということは、教育目標としては重要だと思います。多様な大人のサンプルに触れることが、児童・生徒の職業観や人生観を広げることにつながります。とは言え社会人を学校に呼んで話してもらうだけでは、単なる武勇伝で終わってしまう可能性もあります。社会人講師がハラスメントだととらえられかねない発言をしてしまうケースも考えられるため、事前にNGワード等も含めてしっかりと目線合わせをしておくことが大切です。このように学校を外に開いていくような授業を設計するのは、先生だけではなくなかなか大変な部分もあります。そこで活用したいのが、学校と地域社会の教育資源の橋渡し役を担う、コーディネーター的な人材です。1校だけでは活用しきれないという場合も、コーディネーター人材を教育委員会が雇用し、地域内の学校でシェアする等、配置の仕方もいろいろとやり方があるのではないのでしょうか。



4 「未成功」を重ねる学びへ

よく「失敗を恐れずに挑戦しなさい」という言葉を聞きますが、実際は失敗すると「何やってるんだ!」と怒

られてしまうことも多いものです。Try and Error という言い方も同じで、挑戦しても間違い扱いされてしまうなら、やりたくないブレーキがかかって当然です。挑戦の結果がエラーだとは限りません。うまくいったからこそその学びもありますし、うまくいなくても次につながる学びが必ずあるはずです。そこで、前向きな挑戦を促すために、Try and ErrorではなくTry and Learn、失敗ではなく「未成功」という考え方を広めていきたいと考えています。入学式・始業式の校長先生のお話や来賓挨拶でどんな話をしようかと迷っている方がいれば、ぜひこの言葉を使っていただきたいと思います。

社会には様々な課題がありますが、正解は1つではありません。正解が1つに決まっている問題への回答能力は、AIの方が人間よりもずっと優れています。撮った写真をアンディ・ウォーホル風に画像加工できるアプリ等を思い起こしてみればわかる通り、AIは特定の処理を行うことや限定された領域における学習等は得意ですが、オリジナルを作り出すことはできません。初期条件を与えたり、意味を見出したりするのはあくまで人間なのです。人にしかできない力を伸ばし、AIにはできない仕事を担える人材を育てていくためにも、学びの場で積極的に挑戦していくのは大切なことです。挑戦してうまくいかなかった結果を「失敗」ととらえるのではなく、手を替え品を替え、質の高い「未成功」を積み重ねて成功を目指すという考え方を、ぜひ広めていきましょう。

孔子の『論語』の有名な一節に、「学びて時に之を習う。亦説(またよろこ)ばしからずや。朋(とも)有り遠方より来る。亦樂しからずや」というものがあります。学習の原点は楽しいこと、人と会うことは楽しいことなのです。